

# 第63回 福井県保育研究大会 報 告 書

と き 令和7年6月21日（土）

ところ 結とびあ（多田記念大野有終会館）他

主 催

福 井 県

社会福祉法人 福井県社会福祉協議会

大 野 市

# 目次

大会日程	・・・・・・・・	1
大会参加者数	・・・・・・・・	2
分科会報告	・・・・・・・・	3
第1分科会	新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～	
第2分科会	配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて	
第3分科会	保育者の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する	
第4分科会	地域の子育て家庭への支援の充実にむけて	
第5分科会	子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた 関係機関とのネットワーク	
第6分科会	家庭や地域との連携による食育の推進	
第7分科会	保育の社会化にむけて ～保育の営みをいかに社会に発信するか～	
第8分科会	公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割	
全体会報告	・・・・・・・・	32
大会宣言	・・・・・・・・	36

## 第 63 回 福井県保育研究大会 日程

令和 7 年 6 月 21 日（土） 9：30～12：30

### 【午前の部：分科会】

分科会	研究テーマ	会 場
第1分科会	新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～	学びの里 めいりん
第2分科会	配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて	
第3分科会	保育者の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する	結とぴあ
第4分科会	地域の子育て家庭への支援の充実にむけて	
第5分科会	子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた関係機関とのネットワーク	
第6分科会	家庭や地域との連携による食育の推進	
第7分科会	保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～	
第8分科会	公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割	

### 【午後の部】 13：30～16：30 会場：結とぴあ

内 容	
(1) 全 体 会	
○開会の言葉	福井県社会福祉協議会保育部会長
○保育の歌斉唱	
○児童憲章朗読	
○挨拶	福井県副知事 鷲頭 美央 福井県社会福祉協議会副会長 稲山 幹夫 大野市長 石山 志保
○祝辞	福井県議会副議長 田中 三津彦 氏 大野市議会議長 高田 育昌 氏
(2) 研究発表	
テーマ	「主体的に遊ぶための環境づくり ～一人一人の思いを支える保育者の役割～」
発表者	越前市保育研究会
(3) 記念講演	
テーマ	「支援が必要な子どもをつつむクラスづくり」
講 師	桃山学院大学人間教育学部 教授 松久 眞実 氏
(4) 大会宣言 宣言文朗読 いなほこども園 保育教諭 高岡 夏希	
(5) 次年度開催地挨拶 美浜町こども未来課長 西野 文隆 氏 若狭町子育て支援課長 原田 太輔 氏	
(6) 閉会の言葉 大野市教育委員会こども支援課長 岡 吉男	

## 第 63 回 福井県保育研究大会 参加者数

	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会	第6分科会	第7分科会	第8分科会	全体会のみ	その他 (幹事等)	計
福井市	34	35	22	15	17	16	12	4	0	—	155
敦賀市	5	3	1	4	2	2	0	1	0	—	18
小浜市	8	5	1	3	4	1	5	2	0	—	29
大野市	5	6	4	2	0	4	1	3	2	8	35
勝山市	9	5	3	2	1	3	0	1	1	—	25
鯖江市	8	9	8	3	9	5	3	5	1	—	51
あわら市	4	5	4	3	3	3	2	3	0	—	27
越前市	7	10	9	2	2	7	3	17	5	13	75
坂井市	11	13	9	3	2	8	0	1	0	—	47
永平寺町	2	2	1	1	1	2	2	1	0	—	12
池田町	2	1	1	0	0	0	0	0	0	—	4
南越前町	2	1	2	2	0	1	0	1	0	—	9
越前町	5	5	6	1	1	1	0	1	1	—	21
美浜町	3	1	2	0	0	0	0	1	0	—	7
高浜町	2	1	1	1	0	1	0	0	0	—	6
おおい町	0	1	1	1	2	0	0	0	0	—	5
若狭町	2	1	1	2	1	0	1	2	0	—	10
その他 (学識助言者)	2	1	1	1	1	1	1	1	—	—	9
計	111	105	77	46	46	55	30	44	10	21	545

# 分科会



## 第1分科会 <新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～>

司会者	福井市こども未来部こども保育課 栗野保育園	保育専門官 副園長	服部 悦子 田中 舞子
助言者	福井県教育庁義務教育課幼児教育グループ もみじ認定こども園	主任 園長	坂ノ上 忍 出倉 義昭
意見発表者	中央こども園 にじいろこども園	保育教諭 主任	坪内 依美 師田 快枝
幹事	篠座こども園	主幹保育教諭	井尾 成美

### 1. 意見発表の概要

#### ◎「多様性の中で育ち合う異年齢児保育」

- ・少子化の影響を受け、一斉保育が主となる同年齢児保育から異年齢児保育に移行する。
- ・合同保育をする中で2歳児のみは、生活習慣を身に付けるためクラス単位での保育とするが、異年齢児活動も取り入れ柔軟な保育を行っている。
- ・異年齢児保育に移行した結果、下記のように感じる。

- ①子どもの姿・・・子ども同士の関わり、思いやりと自己肯定感、集中力と充実感、意欲、育ち合いが見られる。
  - ②職員の姿や意欲・・・負担の軽減、子どもへの対応、子どもに任せる、失敗は大事な経験と捉えられる様になった。
  - ③保護者・・・子どもの成長を感じ園の保育に理解が得られるようになった。
- ・今後の課題は、遊び込める環境、職員の連携の強化、子どもの主体性をより重視していく事である。

#### ☆質問

- ・一斉保育から異年齢児保育に変えていった始まりは？  
→姉妹園より園長が代わってきて、クラス担任が苦勞していること、一人担任では子どもに関わることが少なく、やりたいことが出来ない状況を見た。他園の情報を聞いて、新園長が異年齢でやってみようかと提案したことがきっかけとなった。
- ・保育を変えるとき保護者への説明はどのようにしたか？  
→園長が全てを背負う覚悟を持って保育を変えていくという思いを伝え、保護者から声が上がればその都度丁寧に説明していった。

#### ◎「多文化共生保育を通して、一人一人に寄り添う保育へ」

- ・園児の37%が外国籍児の為、言葉の壁、生活習慣・食生活の違い、外国籍保護者との関わりが難しい。
- ・外国籍児補助職員に園の教育、保育について理解してもらったり、お互いの文化と生活習慣の違いについての園内研修を実施したりした。また、外国籍児保護者に対して繰り返しコミュニケーションを取ったことで信頼関係が深まっていった。
- ・育ってきた環境やお互いの文化を知ることによって相手を理解し、一人一人に寄り添う保育へと保育者の意識が変わっていった。
- ・他国の文化や多様性を認め合う心、互いに相手を尊重し合う心、みんなちがって、みんないい…そんな一人一人に寄り添う保育環境を作っていきたい。

#### ☆質問

- ・ブラジルの生活習慣に合わせているということだが、日本の子どもへのマナーや文化はどのように伝えているのか？  
→ブラジルの生活習慣にも寄り添いながら、お互いの文化や行事を大事にしている。園の子ども達には、それぞれの国の行事や文化を写真を使って伝えたり、遊びや行事を通して知る機会を設けたりしている。
- 保育者がブラジルの文化やマナーを知り、外国籍児の気持ちに寄り添い関わることで、日本の

---

子ども達も自然とブラジルの文化やマナーを知るようになっていく。また、保育者もブラジルの文化や生活習慣を知ることで、外国籍児に対して、寄り添う言葉がけに変わっていった。外国籍児に対して日本のマナーを知ってもらうには、これから日本で過ごす中でどのようなマナーが日本では大事であるかをも丁寧に伝えている。

## 2. 討議の概要

<新たな取り組みをする時の職員間での共通理解や連携について>

- ・コロナ禍で保育、行事のあり方が見直され、新たな取り組みのメリット、デメリットが出てきた。
- ・日々の保育に追われ、人手不足や時差出勤により、話す時間が持ちにくく、職員全体での共通理解が難しい。
- ・たわいもない話ができる雰囲気作りから、話しやすい環境を作っていく。
- ・職員間の連携は必要だが、色々な立場の職員がいるので温度差がある。
- ・ICTを利用して各クラスで情報共有ができる。
- ・新しいことを決める時は一度クラスに持ち帰って色々な先生の意見をまとめる。
- ・伝達漏れがないようにチェック表や伝達ノートを作るなど色々な工夫をしている。
- ・新しいことをする時は職員間の共通理解が大切。
- ・保護者に伝える際は職員も共通理解をして子どもの成長を伝える。
- ・新しいことにチャレンジしていきたい。

## 3. 助言者のことば

### ●坂ノ上先生より

<意見発表を終えて>

- ・その時代の考え方、その時に大切とされてきたことは変わっていくもので、時代の変化に合わせて、何かをきっかけに今までの当たり前を見直す事はとても大切である。
- ・自分の園はどうしたらいいかという事は、今日の前にいる子ども達の姿をよく見て、子どもから学び考える事が大切である。
- ・安心できる環境の中で自己発揮できているか、この子達に必要な事は何か、固定観念に捕らわれず今大切な事はなんなのかという事を日頃から意識することが大切である。
- ・保育者がこれをしたという思いも大切だが、子どもがそこでワクワクしているか、楽しんでいるか、これでいいのかという思いを持ち続けることによって、やらされている感ではなく、自分達で考え主体的に取り組める大人になっていくのではないか。
- ・友達を好きになると、もっと相手の事を知りたくなる。そして友達を大事にしたくなる。幼児期にたくさん経験することで、お互いを尊重できる大人になっていくのではないか。

<グループ討議を終えて>

- ・意見者の発表を自園に持ち帰り、皆に話すことが新しいことに挑戦するきっかけになる。すぐに変わらなくても、成果が出なくても、皆で考えることが大切である。
- ・「学びをつなぐ希望のバトンカリキュラム」を読むとヒントとなるページがたくさんあり、先生方の共通理解に繋がると思うので、変わろう！というきっかけづくりとして活用してもらいたい。
- ・子どもの良さ、変わったところなど良い所を互いに褒める事から始めよう。そうすることで私達自身の環境の工夫や関わり方に繋がっていく。子どもと共にワクワクする毎日、保育って楽しいと感じる毎日を過ごしてほしい。

### ●出倉先生より

<意見発表を終えて>

- ・変化することは大切である。子ども達のため、保護者のため、職員のため、保育を変えていく。
- ・外国籍は意思疎通が難しい。職員間の連携や保護者との連携など、どのように子ども達のために運営していくかを時代の変化に伴いチーム保育として考えていく。
- ・地域の特性を生かした支援は、少子高齢化や外国籍児の増加には自分たちで考えて、ピンチはチャンスと捉え、職員間での連携を取ることが大切である。

- 
- ・職員の充実、チーム保育が大切になる。職員同士が連携することで良い保育が成り立つ。
  - ・保育実践、園児のために必要なものは、職員の知識や経験である。
  - ・この大会に園を代表して来てくださった先生方には、園に持ち帰り職員間で共有し、特色のある良い園を職員皆で作ってほしい。子ども達、地域が盛り上がるのではないかな。自分のスキルを上げるとともに園の改革をしていって欲しい。

<グループ討議を終えて>

- ・新しいことをはじめる必要性や共通理解・連携の重要性については、理解されている通り。
  - ・園児のため、職員のための手段はチーム保育である。連携を図り、共通理解を図って、変えていくことが大切。
  - ・新たなことに取り組むには、パワーが必要である。皆の理解がないと出来ないことで、園長一人の力では上手くいかない。
  - ・園のビジョンに基づいて変えていかなければ、子ども達には反映されない。
  - ・今後の実践には、共通理解・連携が大切。ねらいや手段を共有し、皆が一つの方向を向いて、改革を進めていく。
- 



## 第2分科会 <配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて>

司会者	金山保育園 まつぶんこども園	園長 園長	伊部 悦子 園 里香
助言者	福井大学学術研究院教育・人文社会系部門 教員養成領域発達科学講座 福井市こども未来部こども保育課	准教授 保育参事	藤岡 徹 南京 真由美
意見発表者	いなほこども園 金津東こども園	主幹保育教諭 保育教諭	立川 真由美 丸子 知美
幹事	いなほこども園	副園長	近藤 明子

### 1. 意見発表の概要

◎テーマ 園全体で寄り添う支援をめざして

- ・近年、かかわりが難しい子が増え、保育・教育の必要性を感じている。
- ・気がかりな子の支援は担任まかせになり、園全体で話し合う機会がないこと、情報共有ができていないことが課題。
- ・一人ひとりの成長をしっかりと支えていくために、どのような保護者支援に取り組みばよいか、園全体で話し合ってきた。
- ・取り組み内容として、子どもを知る・職員間の連携・保護者支援を実践した。
- ・担任だけでなく、園全体で考えていくことで、いろいろな視点から子どもの姿を見ることができ、新たな成長を共有することができた。
- ・保護者支援に関しても、園と保護者とが同じ思いで目的に向かって進めていくことができ、見えづらかった家庭での様子も聞くことができた。
- ・今後もカンファレンスや家庭への支援を続けていきたい。

◎テーマ 配慮を必要とする子と、保護者支援について考える

- ・配慮を必要とする様々な特性をもつ子どもが増え、対応の仕方や保護者支援が、難しいと感じている。
- ・よりよい支援を行うため、巡回カウンセラーへの相談や、研修を受け、園の子ども達の困り感や保護者支援について考えていくことにした。
- ・取り組み内容として、①園内でケース会議を行い、困り感のある子について話し合う。②関係機関に相談、研修への参加で学びを深める。③私たちができる保護者支援について考える。この3つを実践した。
- ・事例を話し合うことで、子ども達が何に困っているのか、その子の課題が見えてきた。
- ・研修や巡回カウンセラーのアドバイスを受けたことで「愛着の問題」という新たな視点で、子ども達を見守っていく大切さを知ることができた。
- ・様々な視点で見ていくことで、一人ひとりに合わせた対応をする必要性を感じた。
- ・保護者支援では、園でできる支援を考え、今後も続けていきたい。
- ・様々な特性があっても、一人ひとりに寄り添うことで、家庭への支援に繋げていきたい。

### 2. 討議の概要

◎討議の柱

- ・配慮を必要とする園児に対して、園としてどのような取り組みをしているのか。
- ・保護者支援の在り方について
- ・各自治体には、子どもや保護者に対してどのような支援があるのか。

### 3. 助言者のことば

<藤岡氏より>

#### ○いなほこども園

- ・園全体で問題提起をしたことで、職員間に広がり、職員で情報共有でき、支援できた。
- ・園全体で一人の子を見ることでいろいろな情報が集まり解決方法がたくさんできた。
- ・子どもを支えることが担任を支えることにもつながる。
- ・いきなり気がかりな行動が減るのではなく、じわじわと適切な行動が増えて良くなっていく。
- ・「個別の支援計画シート」にその子の長所や得意な部分、好きな物を取り入れ、活用されていることは重要なポイント。

#### ○金津東こども園

- ・事例を通していろいろな角度から気になる子の支援が見えてきてよかった。
- ・その子の頑張っているところや良い所を取り上げていて気になる言動のみにとらわれていないところが良かった。
- ・悔しいことが悪いことではないと受け止めていたところも重要。
- ・感情が生起すること自体は自然なことなので、出すことはいいが、出し方がポイント。別の支援で気分転換ができるように対応した。
- ・家庭への支援は、無理せず子どものことを理解して園でできることをしていく。
- ・どれだけ大人から見て問題行動でも、子どもにとっては何とか社会に入ろうとする適応行動であることを理解していく。

<南京氏より>

#### ○いなほこども園

- ・園全体で見ることで担任の負担が減り、その子の良さを見取りながら一緒に考えていけた。
- ・作成したシートを園だけでなく小学校、中学校とつなげて切れ目ない支援につながるとよい。
- ・多方向から見て、書いているが負担になっていないのか？  
→自分を振り返るきっかけになっている。日頃感じていることを書いているため負担になっていない。



### 第3分科会 <保育者の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する>

司会者	まごころ認定こども園 今庄なないろこども園	園長 保育教諭	高尾 和人 内藤 和子
助言者	仁愛女子短期大学 藤ヶ丘保育園	副学長 園長	石川 昭義 大西 通代
意見発表者	えばたこども園 織田こども園	主幹保育教諭 園長	大西 美由紀 高田 真寿
幹事	開成こども園	主幹保育教諭	森田 亜紀

#### 1. 意見発表の概要

◎<自己認識と他者評価の循環 高田 真寿氏>

自然豊かな立地にある織田こども園で、子供たちは自然と触れ合いながら、「子どもたちのやってみてみたい！できた！」を大切に、「楽しむ力・考える力・がんばる力」豊かな感性を育てている。

- ・田んぼでの泥んこ遊び…子どもの思いがマイナスからプラスへ。保育者の声掛けで子どもの「やりたくない」を「やってみよう」に。
  - ・・・子ども達の豊かな育ちにつなげる取り組み
- ・発表会を終え保護者の反応は？連絡帳の声→保育者の励み、自信、エネルギーにつながり保育の質の向上につながる。→「イキイキしたこどもの姿」になる。・・・外部循環
- ・発表会を終え、保育者の振り返り→「～すればよかった」等、保護者の感想と違いマイナスな反省ばかり出てきた。また、職員同士で良い所を認め合う機会が少ない。
  - 自己の保育の成果→自己の保育の魅力→同僚からの評価になる。・・・内部循環

自らの取り組みの価値に気付きにくい

- ・保育者の真摯な思い→自己の保育の魅力に気づき **自己認識**  
→同僚からの評価により **再認識**
- ・登降園時での姿・連絡帳・写真・行事を通して発信。

まとめ

- ・保育者の資質向上とは。
- ・保護者や地域、同僚からの言葉から自分では気付かなかった良いところを再認識。
- ・子どもの姿からの学び、保護者や地域からの評価。

意見・質問

Q伝え合う時間をどのように作っているのか。

A保育中は難しいので午睡中等に時間を作っている。

以上児は以上児、未満児は未満児中心になる。

全体での時間は取っていない、個別に話すことが多い。

Q地域に自然に広がる、発信するためにどのような形で行っているのか。

Aお祭りなど地域の行事に参加する際に、子ども達と保育者が接点を持つ等、普段している活動の中で、あえて園から発信をせずとも広がっている。

◎＜語り合える風土作り 大西美由紀氏＞

子ども達の「やってみたい」「できた」を大切に「楽しむ力、考える力、頑張る力」を育て、保育者の資質向上を目指す。

1 みあいっこ

- ・年2回、互いの保育を見せ合い、午睡の時間に見取りを語り合う時間を設ける。
- ・子どもの姿を肯定的な視点で見取ることを意識する。
- ・指針、保育要領の内容と照らし合わせて、付箋を使って意見、アドバイス。  
→・見られる事への抵抗感が和らいだ。
  - ・保育を振り返るきっかけとなった。
  - ・アドバイスをもらい、自信へとつながった。
  - ・発達を学ばなければいけないと、振り返るきっかけとなった。

2 ポスターセッション

- ・子どもの姿、感じたことを整理してポスター作成→保護者に保育の発信。
- ・保護者の反応…遊びの様子が見られてよかった、子どもの興味関心が知れた。
- ・子どもの声や遊びを見取る力を養う。
- ・自分の保育を発信し職員間で伝え合う。
- ・保育の連続性につながる、子どもの声をよく聞くことを意識するようになった。

3 公開保育

- ・園外を巻き込んでの【みあいっこ】という考えで取り組み。
- ・色々な園の意見やアドバイスを聞く事ができ新鮮だった。子どもの良かった点を教えてもらった。自園の良さに気付ける機会になった。
- ・意見アドバイスを持ち帰り、自園で活かす

考察

- ・自分の保育を認めてもらえる職員の内面的な変化が見られた。
- ・保育者への資質向上→発信する力→多様な視点→遊びの持続性→見取る力への繋がり。
- ・子ども達の興味関心や面白さや保育の良さに気付いた。
- ・子どもの声に耳を傾け、どう実践に活かすか、保育者の資質向上につながっていけるかが課題語る楽しさ、無理なく・楽しく を続けていく。  
→クラス会議（午後の時間を使って）、雑談会（終礼後の時間を使って）で共有する。

質問・意見

Qポスターセッションはドキュメンテーションのような物なのか。

A職員が子どもの声を聴く、次の環境へ繋げていくことを目的としている。

保護者への発信として自分の言葉で伝えるために、まずは同僚へ簡潔に伝え、力をつけている。

Qポスターセッションは一つの活動に絞って行っているのか、やり方等。

A先生がやってみたいと思った事を一年間でやる（ごっこあそび、廃材遊びなど）。それぞれが遊びや一人にテーマを絞って作成している。

## 2. 討議の概要

◎保育者が資質向上していく為に、自園で取り組んでいること

公開保育

- ・高浜町公立3か所では異動もあるが、各園のカラーもありながら資質向上の為、1年で公開保育を行っている（環境や見取りの話）。  
見合いっこを始める予定（アドバイスをもらったり環境ついて話し合ったりする）。
- ・あわら市全園で公開保育を行っている。
- ・負担なくできるよう5分程度でもできる工夫を行っている。  
ハードルを低く、異動がある園では、始めの一步が難しい。  
職員が負担になる。  
年間計画に公開の日程を提示している。  
見られる方もハードルを低くする為に、見に行く職員がそのクラスの保育に入り、気付きを覚えてもらう。  
期間や見に行く対象を絞る。
- ・見合いっこをしていると公開保育の際に気負いなく普段の保育を見てもらう事ができる。

- 
- ・地域交流でいろいろな人が見に来られるので、見られる事に慣れる。
  - ・次週の週案を集まって確認している。

#### 園内公開

- ・正職だけでなく、パート、補助の先生も含め、カメラを持参して参加。  
環境図、保育の悩み、内容等の用紙を準備3日間。  
担任が気づいていない所を周りがカメラで撮り、パソコンに入力、ポスターセッションを作成。  
弱みを強みへ。  
見取り図を玄関にて掲示→保護者へ発信。

#### ポスターセッション

- ・2月ごろに発表。  
テーマ(遊びの発展、遊びの連続性)に基づいてポスターセッション(公開保育)のリターン  
→いいねシールを貼ってもらう。

#### 保育の見合い、見合いっこ

- ・鯖江市で新たにクラス担任になったら見ることができる。  
エピソードを研修で持ち寄り、良い所を話し合い、自分も保育を振り返れる。  
鯖江市独自の「不思議」「外遊び」などエピソードのテーマがある。
- ・未満児、以上児それぞれで行い、共有する。
- ・他園と見合いごっこ保育を行う。  
他園の保育を見ることが学びにつながる、自分の保育を振り返ることができる。
- ・以上児の時は未満児が、未満児の時は以上児が見合いっこを行う。
- ・指摘ではなく良い所を見つけよう。  
子どもの姿、環境の良かった所に目を向けて付箋に書く。  
ポジティブな意見が多く、次も頑張ろうと思えてくる。
- ・ねらいを言語化するようになる。
- ・10の姿から読み取り、年に一回クラスごとにしている。
- ・療育保育のサポートを園がしている。  
どこを見に行ってもOK、見られなかった人のために動画も撮る。

#### ドキュメンテーション(ポートフォリオ)

- ・保護者向けに連絡帳とは別にファイルに入れて写真付きのお便りを配布する。  
日頃の保育の中での子どもの姿を写真や吹き出しを付けてA4(月一回~二回)配布。  
園内リーダーの事例を読んで職員で意見を出し合う。
- ・話し合いの場を作り、分かりやすく伝えようとする取り組みを始めた。  
(時間の確保の難しさもある)
- ・子どもをよく見るようになった。

#### ポジティブ保育

- ・ポジティブ保育を通して職員がポジティブになり、そのことが資質向上につながっている。

#### 園内研修、会議、乳児部会、幼児部会、職員同士、事例の語り合いなど

- ・クラス単位と各クラスから代表が出て全年齢で話し合う。  
気がかりな子の姿や対応について→クラスに持ち帰り実践。
- ・クラスの悩みの相談や意見交換(週1、毎月)。
- ・遊びの経過、連続性を踏まえてエピソードを書く。  
クラスで書いたものを園全体で読み取り、共有している。  
その事例を通して気付きがあり、園での保育統一にもつながっている。
- ・職員会議では、メモやPCで気付きを入れる。
- ・市内の各年齢の代表者が集まり、悩みを話し合う場がある。その後、園に持ち帰り、保育に活かしている。  
若い職員同士認め合う場となっている。
- ・1時間の休憩のうち、30分を休憩、30分を語り合う時間に当てている。  
同じ議題について二日間に渡り行う。
- ・研修のテーマを園長が決める。
- ・自分の良さ、人柄をほかの人が教えてくれる。

---

自分の事を振り返ると反省ばかりになるので良い。

- ・自分の事、プライベートの事を話しながらお互いを知り、風通しのよい職場関係を作る。皆が同じ気持ちで同じ雰囲気過ごす事を大切にしている。
- ・年代別でお菓子を食べながら雑談する時間を設けた。保育から離れてプライベートの事を話すことで、人前で話す機会ができた。
- ・園長先生の言動一つで風通しが変わってくる。
- ・クラス単位で目標を立てる子どもに肯定的な言葉がかけをする、園長から褒められるケーキをもらえる。

#### 遊び研修

- ・季節にあった研修を共有する。

#### カラフルタイム

- ・3, 4, 5歳のみ園でたて割り保育を行っている。  
「こんなことをしましょう」と2日間でしたり、単発でしたり…  
担任が気がつかなかった子どもの成長や姿に気づく。

#### 分野別の会議

- ・保健看護師、調理師の分野別の会議  
悩みや情報交換の場になってとてもいい。

#### 困ったノート

- ・自由に書き込めるようにし、それを見てアドバイスなど伝える時間を設けている

#### クラス単位で目標を決める

例えば…部屋の環境づくり、ハウレンソウを大事にしよう、園全体のねらいとして忙しがない。

- ・子どもに肯定的な言葉を掛ける→それに対する振り返りを行う。  
自分の保育を振り返るきっかけになっている。

#### 外部からのアドバイスをもらう機会がある

- ・どうしたら子ども達が楽しく遊べるか（クラスで一つ）。  
一つのテーマに絞って、半年のスパんでパワーポイントにまとめて発表する（年一回か二回）。  
それを外部の人に評価してもらう。

#### 働きやすい環境作り

- ・資質向上に繋がる＝同じ方向に向かっていくことが大切。

#### 行事を減らした

- ・日々の保育を大切にしようという思いから、行事を減らした。

#### ICTの導入

- ・お便りを付け導入していった。

#### 話し合いの場での問題点

- ・年齢、雇用形態が違う先生もたくさんいるのでどのように共有するのか。
- ・タブレット化している事で、見返してアドバイスしにくくなっている。  
紙の時には日誌など返ってきた時に振り返る、書き足すができるが、タブレットはできない。
- ・職員の人数が多く、なかなか時間が取れない。
- ・週一の勉強会（モンテ）もあるが、クラスの先生との語り合い話し合いの時間がない。
- ・働き方改革、作業、職員の負担との兼ね合いが難しい。
- ・職員全体の中で間違ったらどうしよう、静かなところでは言いにくいという問題。

---

◎自分の資質向上を感じ取り、それをどう保育に活かしているか（各園の事例）。

#### 保育・遊び

- ・得意分野を活かして保育に活かす（虫が好き、手作りおもちゃを作る）。
- ・新聞紙遊びを通して遊びの広がり 海道先生より指導を受け勉強している。
- ・縦割り保育にてブロック遊び。
- ・朝9時まで縦割り ラキュー、ブロック遊び、パズル。
- ・得意分野があり、子どもがやってみたいと思った時に向き合っている。職員にも子どもにも認められることが保育の向上にもつながる。
- ・子ども達と振り返りをしていく中で、次はこうしていこうと反省したり、活かしたりしている。
- ・目の前の子ども達の興味のあることを一緒に楽しんで進めていくことも一つの学び。
- ・設定保育ばかりではなく、子どもの声を聞いて保育を進める。
- ・子どもを見る力、環境構成、声掛けなど考える力がついてきた。

#### 見合いっこ

- ・必ず褒めてくれることをわかっている、教えてくれるのでいつも通りの保育をしている。慣れてくると見られることに抵抗がなくなる。自分自身の振り返りになるので良い。
- ・みあいっこを通して学んだ環境作りを取り入れた。
- ・みあいっこや研修での学びを園全体で声掛けや見守りをするようになった。

#### 公開保育

- ・日頃のそのままの姿を見てもらう。慣れていないと緊張する。大きい保育園になると抵抗がなくなる。
- ・各園の園内リーダーがいる園を、市町アドバイザーの先生が実際に見に行き助言する市の取り組み。
- ・公開保育のハードルが低くなると、見られる方も肯定的、意欲的にとらえることができる。

#### ドキュメンテーション

- ・子ども目線の写真、後ろ姿など 全員の子どもの出ていない旨を保護者に伝えておく。
- ・写真を通して、子どもを見取る力、子どもの声を聞く力を育てたい。

#### ネットで発信

- ・週2回ルクミーで写真（ねらいを持って撮る）をあげて発信する。

#### 園内研修

- ・主幹の立場から、その先生の良かった所をその都度ほめている また、保育士の経験もあるのでアドバイスをしている。
- ・気がかりな子への対応をアドバイスしてもらったり相談したりする。  
→アドバイスする方もされる方も、お互いに学びになっている。
- ・子どもの姿を簡単な事例にして、各クラスで話し合う。
- ・研究発表を通して、皆で取り組み話し合えたことがよかった。

#### 園外研修

- ・市の年齢別研修で遊びや悩みの情報交換をしている → 園に持ち帰り実践。
- ・今回のような研修を通し、情報交換し園に持ち帰り取り組む。  
→ 話しあう機会になり、また園全体の資質向上になっている。
- ・風通しの良い関係、雰囲気があることで、意見を出しあえたり認められたりすることが褒美になり、日々の保育を頑張れる。
- ・肯定的に自分が認められることで、自身の心のゆとりになり、子どもをポジティブに見ることができ→自信をもって保育でも何でも挑戦できる。

#### 職員間での語り合い・連携

- ・職員同士で伝え合い、後で記録に残す。
- ・色々な先生と子どもの姿を共有しているため同じように関わることができる。→子どもの成長
- ・語り合い、振り返りをするようになってから、連携がうまくいくようになってきた。

---

みんなでやっという一体感につながる。

- ・ふとした時に良い所を見つける機会から自分が得た知識、学んだことが活かされる。
- ・会議で集まった場で意見を言うのが難しい。また、意見をもらい落ち込むこともある。
- ・職員同士、同じ思いで保育を進める。共有→可視化。
- ・語り合いから次に何をすると良いか見通しが持てるようになった。
  
- ・保育参加後、クラス懇談があり、当日の保育の様子について保護者の意見を聞き、次に活かしていく。
- ・失敗したとしても、どうだったか考えることで、自分の資質向上につながる。
- ・遊び研修の中で教えてもらったことを保育にすぐに取り入れる。
- ・リズム遊び 日によって参加する年齢違うが、クラス関係なく子どもを見ていく。  
→アドバイスをもらって各クラスへ返していく。
  
- ・行事後にアンケートをとる
- ・自己分析（200項目くらいの）

---

### 3. 助言者のことば

<石川昭義先生より>

① 「自己認識と他者評価の循環」について。

- ・循環により保育の質の向上を図る。
- ・自己評価 他者からの評価。
- ・保護者の声は新しく入った保育者にとって前向きな影響。
- ・内部の話し合いでは反省や困りごとに焦点（肯定感が不十分）。
- ・「言わなくても分かる」空気。
- ・他者評価は前向きな影響になった。自己評価は自己肯定感が下がった。
- ・自分あるいは自園の保育を外にひけらかすものではなく、自慢するものでもないような謙虚さ
- ・自らの仕事の価値に気付いてほしい（園長の思い）。
- ・管理職立ち回りが大切…職員の中にどう溶け込ませるか（施設長）
- ・何をもちて保育の効果があるのか？…難しい。
- ・保育の効果とは？  
→（高田先生）日常の中でこどもの内面の成長はあるが、意見発表での表し方が難しい。
- ・日常の中での内面の成長を職員で把握（施設長が中心となって行う）。

② 「語り合える風土作り」について

- ・「3つの実践」を通して保育者の資質向上を図る。
- ・みあいっこ ポスターセッション 公開保育
- ・指針、要領と照らし合わせながらの話し合い。
- ・子どもの姿について肯定的な意見を持つ。
- ・職員間で楽しそうに子どもの姿を語り合う。
- ・若手が自分の言葉で話せるようになる。
- ・周りの意見を聞き入れる雰囲気がある。
- ・「やってよかった」「こんな一面があったんだ」（子どものことも先生のことも）ということに気付く。  
→子どもだけでなく、先生の一面、自分では気付けないもう一人の自分に気付ける。
- ・保護者への保育の発信（ポスターセッション）。
- ・園内研修の取り組みや保育者の保育の視点を知ってもらう。
- ・保護者の意見を取り入れる。

Qアンケートなど活用して保護者へ発信しているのか。

Aポスターセッションは長期に渡って行っているので保護者の感想を頂く事はあっても意見を日々の保育へ取り入れるのは難しい。  
子どもを見るという、声を吸い上げることに繋がっている。

---

→自分の考えを振り返ったり、まとめたりする機会。  
園（組織）としての保育の見直しの機会。  
園長先生を中心にこれからも子どもの声に耳を傾けて。

---

<藤ヶ丘保育園 大西通代先生より>

（自分を認める大切さ）

保育の意義を見直す中で今回のテーマが重要。

自分たちの保育の良さ、お互いの保育の良さへの気づき。

一年間の保育の反省・見直しを行う際に、4月に子どもたちが一年間積み上げてきた力を評価できた。

子どもの話を普段からする事の大切さ。

子ども達から地域への発信→子どもの目を通すと伝わりやすいかなと思う。

---

<石川昭義先生より> グループ発表についての助言

保育の質の向上に向けて

- ・自園の保育の理念・方針の理解  
全体的な計画の理解と共有
- ・自園の特徴・強み・弱みの理解と共有
- ・自己評価の実施  
個々の自己評価と組織の自己評価

↓

- ・対話の重視（語り合い・学び合いの職場環境づくり） フォーマルだけでなく、インフォーマルな場も。
- ・他職種との協働による保育の質の向上 看護師、栄養士など  
資質向上には自園のねらいを共通理解 自園の強み弱み、先生の得意なことを理解、気づき  
対話の重視、語り合い学び合いの重要性 会議だけでなく、日常の中（廊下など）で話し合える、職場環境の大切さ。多職種との情報の共有もできると良い。

#### **認められる脈絡**

小さな子どものいる暮らし。家族としてのあり方、時間の過ごし方。相談が出来る場として、保育者の力量が求められる。

#### **こども基本法とこども大綱**

この理念を踏まえた実践はどのようなものか、どうあるべきかを研究する園の姿勢が求められる小さな子どものいる家族の暮らしのライフコースがこの20年間で劇的に変わってきた、少子化も進んでいる。

家族のあり方、家族の時間の過ごし方、園と家庭とのつながりの場（子育ての相談ができる場）。

#### **子どもの思いを聞き入れる、訴えを聞き入れる**

子どもの意見を表明する、子どもの気づきをきっかけに保育をしていく。

→表明し、形にしていく、応えていく。

実践の方向性を作っていくのはこれからの園。

子どもの生活を創る 種別を乗り越えて

一生涯の内の数年の園生活をどのように過ごしていくのかを考えていくのが課題。

大人が先にストーリーを作ってしまうのではなく、子どもの発見、気づきから作り上げていく。

保育者の魅力発信を誰に？どこに？

#### **保育者は子どもを通して、命と向き合い、社会と関わる**

- ・中高生が子どもと接する場として、家庭科の授業を連携の場として。
  - ・社会全体で子どもや子育ての喜びを共有して、次世代につないでいくという役割を園、保護者が請け負っていく。
-

---

・赤ちゃんが家の中にいるということの生活の喜びと価値を味わう。

**グループ発表についての助言**

話したり、接したりお互いの理解を深める。

皆さん、それぞれ工夫しながら資質の向上を図っている。

休憩中に保育のこと、子どものこと、プライベートなことも話して交流を持つ。

---



## 第4分科会 <地域の子育て家庭への支援の充実にむけて>

司会者	小浜市子育て支援センター 本荘こども園	園長・主幹 園長	山田 陽子 伊藤 しのぶ
助言者	福井市子ども家庭センター分室 認定こども園北新庄	室長 園長	安井 弘二 天勝 かおり
意見発表者	三島保育園 河野保育園	副園長 園長	清水 晃子 野崎 知美
幹事	誓念寺こども園	主幹保育教諭	中村 幸

### 1. 意見発表の概要

◎「近年の育児環境の中での子育てに寄り添う」

- ・「住み心地ランキング・幸福度ランキング」において2年連続1位という評価を受けているが、現実には子育てデジタル機器に頼る家庭が増えている。そこで町内公私立4つの園で「何を支援すればよいか」を考え3つの実践に取り組んだ。(子育てアンケートの実施、スマホ等がもたらすデジタル障害について5歳児親子を対象に講演会を実施、絵本貸し出しの実施)
- ・アンケートの結果として、平日の降園後から就寝までデジタル機器を使用している家庭が多く、休日はその比率が増えている。平日10時までには就寝が20%、休日は25%となっていて、その一因が寝る前にYouTubeを見ることとなっている。スマホやタブレットは親子のコミュニケーションを阻害したり、子どもの脳や生活に悪影響が生じる可能性があること注目されている。
- ・「スマホに子守をさせないで!」というタイトルの講演会を親子で参加。インターネットを「ほぼ毎日使用する」と答えた子どもの脳の発達がほとんどゼロに近い数値、3年間で脳が全く発達していなかったとのこと。また、使用年齢をなるべく遅くすること、1日合計1時間以内と制限時間をしっかり守ることが大切。ひどい時には、内斜視に繋がってしまうなどの話を聞いた。講演後のアンケートでは「デジタル機器を使わない遊び方を知りたい」といった保護者の声があった。
- ・学校のノーメディアデイに合わせ園での絵本貸し出しを実施。デジタル機器無しの生活を意識するようになった、夜早く寝るようになったという反応があった。一方、絵本1冊でスマホ抑制は無理、意味がなかったという家庭もあった。

<まとめと課題>

- ・今後は、絵本の貸し出しを継続する。行事で保護者が園に来た時に、ふれあい遊びを実践していく。
- ・図書館や支援センター、児童館、地元の子供会等、地域の力を借りての取り組みも考えながら、近年の育児環境の中での子育てに寄り添っていきたい。

---

◎みんなのえがおがあつまって、こころもからだもぼっかぽか

～医療的ケア児を受け入れて～

- ・R3.9月医療的ケア児及びその保護者に対する支援に関する法律施行で三島保育園での医療的ケア児の受け入れを決定し医務室改修。R4.4月三島保育園で医療的ケア児に特化した救命救急の研修等実施。R5年度一般的小児救急法の研修実施。R6年度 看護師4名体制で、順次、医療的ケア児等コーディネーターの資格を取得。
- ・医療的ケア児の保護者との連携として、登降園時に連絡を密に取り合い、随時面談を行う。就学に向けては、話し合いや関係機関との仲立ちをする。
- ・職員間の連携として、看護師、栄養士、担任保育士、担当保育士とのケース会議を行い、全職員に伝達し情報を共有。
- ・関係機関との連携として、関係機関会議を実施することで、その後のケアに生かしている。
- ・他の園児との関わりとして、インクルーシブ保育に取り組み、車いす体験や高齢者体験を実施した。

<まとめと課題>

- ・公立保育園のため保育者の異動もあり、年度替わりには一人一人に合わせたケアの情報を把握し保育を行う必要がある。  
同じ疾患の子はいないため、一人一人に合わせたケアが必要であり、自己研鑽や外部研修等に努めている。

---

## 2. 討議の概要

<地域の保護者支援の充実に向けての自園の取り組み>

- ・在園児に向けての取り組みでは、クラス・個人懇談の際に事前にアンケートを出し、アンケートに基づいて懇談をしている。誕生会では5歳児の保護者を招いて、希望があれば懇談をしている。
- ・保育参加・体験も取り入れている。保育参観では、好きな時間に来てもらい、普段の姿を見ていただきたいので、陰から見てもらうように配慮している。
- ・連絡帳やドキュメンテーションをアプリで行っている。しかし、保護者にスマホを薦めるのはあまり良くないと言っているが、自分たちは取り入れているところに疑問を感じている。また、手書きからスマホに変わってきている連絡帳に冷たさを感じる保護者もいるようだ。
- ・交通防犯教室に親子で参加。
- ・地域の児童や未就園児を夏祭りに招く。中高生に夏祭りのお手伝いをお願いする。
- ・子育て支援で、未就園児を招いて手作り玩具を作る。

---

## 3. 助言者のことば

<安井先生より>

- ・デジタル機器（ChatGPT）を利用して、自分で悩みを解決できてしまうので、相談が減ってきているのではないか。そのため、自分の気持ちを伝える力が落ちている。
- ・医療的ケア児に対してはタブレットが有効になっている。例えば、重症心身障害児がゲームにチャレンジしたり、TC スキャンで目の動きで文章が作れたりするなど。
- ・保育者と看護師などが上手にコラボできたら、子どもも元気になれる。協力しながら楽しい生活を作っていたらと思う。

<天勝先生より>

- ・子育て環境を知るために、町のすべての園でアンケートを実施し現状把握に努めたこと。現状から保育者として役割を再度考え、講演会や「遊びの紹介」へと辿りついたところが良い。
- ・子育てを YouTube に頼ってしまっている現状に対し、講演会の対象を親子にしたことで、子ども自身も自分の体（脳への悪影響）を知るよい機会になったと思う。
- ・医療的ケア児の対応は一人一人違う。保護者、医療機関、職員間など、こまやかな連携、情報共有を行っていくことが必要であり、そこに難しさある。課題として、災害が多い昨今、電源はあるか、医療行為ができる場があるかなど、災害時の対応を考えておく必要がある。
- ・近年の育児環境は、小中高までの支援を地域全体で支えることが必要となっている。コロナ渦で外部や地域との交流が薄くなってしまったが、地域の子育て支援を園がどのように行っていくか考えていくことが大切である。グループ討議では、各園が様々な工夫で子育て支援の活動を行っていることがわかった。地域の親子を支えていきたいという保育者の思いを感じることができた。



## 第5分科会 <子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた 関係機関とのネットワーク>

司会者	しんとくこども園 はぎのこども園	園長 園長	近藤 奈緒 菅原 量
助言者	仁愛大学人間生活学部子ども教育学科 小浜市子育て応援課	准教授 課長	青井 夕貴 福田 雅一
意見発表者	本郷保育園 大島認定こども園	園長 副園長	島津 悦子 一瀬 一美
幹事	いとよミライエこども園	園長	村上 珠乃

### 1. 意見発表の概要

◎<島津 悦子：園児と共に学ぶ防災と地域との連携>

- ・職員間での防災についての知識（特に水害）の向上ハザードマップの共有、避難訓練の見直し
- ・水害時のマニュアルの見直し（小学校・公民館・保護者・自治体等との連携）  
誰でも同じ判断基準を設ける、連絡アプリの使用、避難準備品の内容物の持ち運びの優先順番を表示、休館日の対応。
- ・園児の防災教育  
防災出前授業の受講。子どもならではの視点で新しい発見をする。防災活動・あそび。
- ・実技避難訓練  
地震を想定した環境での避難。雨天時の避難訓練（レインコート）、子どもの心のケア。
- ・保護者への情報発信という課題  
防災についての取り組みが保護者に十分伝わっていない。

<討議>

- ・園それぞれの環境の違いの中で対応している。そして、よりよいマニュアルを考えている。
- ・園ならではの地域交流も学べ、取り入れていきたい。

◎<一瀬 一美：子どもの未来を支える地域のつながり>

- ・地域の方との交流  
食育：地元魚（鮭）をフライにする、料理の大切さ、交流を体感。芋ほりの土の感触、収穫の喜び、子どもの喜ぶ姿を楽しみ、感謝と一緒に活動することを学ぶ。
- 高齢者施設：見守られている安心感。子どもから元気をもらう。交流を続けることで世代交流を深めていく。
- 地域行事（運動会）：親子での交流。異なる園との関わりで保護者のネットワークを繋ぎ、子ども達の社会性を育む。
- 地域子育て支援活動：育児の相談、地域に定着した活動内容。活動のこまめな見直し。
- 消防署・警察との交流：避難訓練を学び、実施。煙体験。防犯学習（いかのおすし）
- 小・中学校との交流：秋祭りへの参加、体験入学、先生との交流、先生同士の意見交換、上級者との関わり、ふれあい体験。

<討議>

- ・地域との関わり大切さを学べた。
- ・子どもたちが安心して生活できるような環境をつくっていきたい。

### 2. 討議の概要

<防災と地域との連携>

- 1 引き渡し訓練をしているが訓練の仕方が園によって違う。  
やってみて、課題が出てくる。アプリを使用しているがつながらない時はどうすればいいのか？個人のスマホは使っているのか？紙媒体も必要。

- 
- 登園する・しないの基準が地域によって違う。  
避難時、途中で渡していいのか？
- 2 自園だけでは守り切れない。地域の交流の重要性。  
引き渡し訓練の取り入れ方。(行事の時にするなど)
- 3 食料以外に必要な物＝トイレ・寒さ対策(多様に使える物)・避難訓練のマナーリ化  
訓練の具体化の必要性。  
保護者への連絡、ネットがつながらない時はどうする？  
ボードや文字で伝える方法。地域の人が SOS に気づけるように報告していく。
- 4 川の氾濫の災害の怖さが分からない人が多い。  
避難する判断基準の重要性。  
裸足保育から避難の時足は大丈夫か？  
トイレ用のスリッパを園自分準備している。  
地震時、外へ出るには？(破片、扉が開かない等)
- 5 第2避難所への避難訓練。遠すぎると現実的ではない。  
民間との協力で近くのを提供してくれた。  
引き渡し訓練で迎えに来てくれない親もいる。  
原子力への避難訓練。  
保育者がどう動くかを話し合う。  
保育者の移動で連携がうまく取れないこともある。  
冬にジャンパーを着て避難。
- 6 平屋、二階以上の園、どうやって避難するか工夫している。  
プール、AED 講習。  
0 歳児の避難方法を決めておく。(誰が抱っこするか)  
非常食を食べてみる。アレルギーの子が他の人にもわかるようにする。  
お迎えをお願いする基準、誰が来るかをアプリで分かりやすくする。  
不審者対策をする。  
害獣対策。
- 7 安全の中での訓練しかしていない。季節によってやり方を変えるべき？  
避難靴を用意すると良いが、園と保護者どちらが用意するか。  
災害はいつ起きるか分からない為、保育者がその時臨機応変に対応しなければならない。残留  
保育児への対応。  
災害時は皆が声を出し合い助け合う。

#### <地域のつながり>

- 1 しようとしても、拒否されることもあるため難しい。
- 2 園での活動を地域の人に伝えていく方法(掲示する、手紙を配布する)  
母親同士のコミュニティーとの連携出来ると良い。
- 3 行事について、地域の人でも参加できる行事の準備。
- 4 繋がりががあると助けを求められるが、コロナもあり薄くなっている。  
園からの発信も大切だが、やりすぎるとお互い重荷にならないか。  
普段の関わりからの自然な交流が理想。
- 5 老人ホームとの交流もコロナでなくなる。  
ボランティア団体が焼き芋等の行事をしてくれる。  
ネットを使って交流する範囲を広げた。
- 6 コロナや不審者個人情報の関係で、交流が難しい。  
高校生が料理を振る舞う。(こども食堂)
- 7 活動する前に、どんな団体・活動があるか調べる事が必要。  
子どものやりたい気持ちから、地域の行事に参加。達成感を味わえた。

### 3. 助言者のことば

#### ◎地域と共に進める子育て

<青井先生より>

- ・実際水害があり、保護者からの要望でマニュアルを作る。

- 
- ・川の拡張により水害が減りつつある。
  - ・避難訓練のマナー化対策。猛暑・豪雪の場合、避難後の行動、地震後の足の踏み場。焦点を絞って訓練をする。
  - ・訓練を経験していくことで必要な事を見直していく大切さ。
  - ・コロナ時地域交流は減るが、近年また交流が増える。
  - ・地域ならではの避難訓練（発電所が近い）
  - ・地域の団体や個人とのつながりを持つ。地域活動でのアンテナをはり、多くの繋がりを見つける。
- 

<福田先生より>

- ・様々な災害についての対応、マニュアル、訓練が必要。
- ・保護者への連絡と引き渡しの重要性。
- ・地域の防災計画、ハザードマップの確認。
- ・地域コミュニティーによる共助。地域全体が連携しなければならない。
- ・具体的な災害マニュアル内容。
- ・川の水位。子どもと非難する事を想定した見直し。
- ・避難訓練、保護者との連携の重要性。
- ・地域との信頼関係が災害時の危機を救う。

<まとめ>

- ・災害に備えている姿が知れて良かった。
  - ・保護者への連絡についての意見が多かった。  
アプリの使用でも、既読が分かるアプリが良い。  
保育園・小・中学校に兄弟がいる時は、同じアプリを使って一本化するのが良い。  
直接連絡も必要。
  - ・普段から近くの人々との連携が大切。これにより子どもの成長にも繋がる。  
ピンチの時への対応が大切。
- 

<まとめ>

- ・保育者自身が地域生活者の一人とは、どういう事か考える。  
園が地域に助けてもらう事も重要だが、持ちつもたれつの関係が重要。  
してもらっただけでなく、地域の為に何か役に立っているという気持ちも大切。
- 



## 第6分科会 <家庭や地域との連携による食育の推進>

司会者	ふじしま認定こども園 和田保育所	園長 所長	南 美保 田中 孝枝
助言者	公益社団法人 福井県栄養士会 鹿谷保育園	園長	石黒 真理子 廣田 栄治
意見発表者	幼保連携型こども園 二葉保育園 坂井松涛こども園	管理栄養士 管理栄養士	板村 明寿実 牧田 恵里香
幹事	誓念寺中野こども園	主幹保育教諭	西澤 ゆみ恵

### 1. 意見発表の概要

◎テーマ 「子どものたちの明るい未来につながる楽しい食育を目指して」

- ・「食べることは生きること」
- ・「健やかな心身はバランスのとれた食事から」
- ・子どもの健やかな未来、明るい未来のためにできることは、幼児期の食育のねらいを見直し、望ましい生活や食生活を営む力を育む。
- ・食習慣の形成は、幼いころからの食生活。
- ・「食」を伝えるのは大人の大切な役割、子ども自ら食に対する興味・関心が持てるようにする。
- ・園の全体目標「食を営む力」の育成に向けてその基礎を養う。
- ・絵本給食の導入（導入から4年目）  
絵本に出てくる料理やおやつをイメージしたメニューを提供。メニューは保護者、職員、子どもからのリクエストと管理栄養士が伝えたいと思ったことを取り入れる。絵本を通して食に関心を持ってもらいたい、食べることを楽しんでもらいたいという願いがある。絵本給食の時にはレシピと絵本の貸し出し、絵本やその料理を紹介する。例えば、「おかしになりたいピーマン」の絵本を通して、ピーマン嫌いな子が興味を持ち始め、口にする姿が見られた。レシピを見て家庭でも作る機会ができた。また、蒸しパンの絵本では具材を子どもに投票してもらいメニューを決定する。  
アンケートを実施したところ、給食に興味を持ったりお手伝いをしてくれたり、家でもメニューを作るようになったという意見が聞かれ、園から発信したことが家庭に繋がった。
- ・日々の食育では、ワクワクするような献立作りを目指す。郷土料理、世界の料理の日などを決めて行っている。郷土料理では、普段食べられない食べ物や地元ならではの料理を知る良い機会になっている。また展示食を設置し、人気給食・手作りおやつレシピも持ち帰ることができるようにしている。
- ・5歳児さん給食お手伝いクッキングを取り入れている。給食に使う野菜の皮むき、カットの体験。給食や料理をすることに興味や関心が高まり、調理師と一緒に給食を食べる時に会話が弾む。
- ・年間食育活動について  
春に、食事のマナー、正しい姿勢、お皿の持ち方など一緒に食事をする中で確認していく。
- ・箸の持ち方は、クラスにあったタイミングで知らせる。4歳の誕生日が来た時点で箸に移行が目標。
- ・遊びの中で箸の持ち方を学ぶ。小さいポンポン、毛糸、メラニンスポンジを使いゲーム感覚で学ぶ。
- ・毎年、未就園児対象の離乳食試食会を行う。月齢に合った離乳食と保護者には給食を提供。試食中には栄養士が離乳食の悩みなどを聞く。
- ・11月24日の和食の日付近に、5歳児と一緒に「だしとり」体験をする。昆布、カツオ、煮干しを触り、だしを取る。白湯との飲み比べ。味噌汁作り。
- ・「食と身体に関わり」を大切にしている。エプロンシアター（ウンチは元気のバロメーター）を使ってバランスの良い食事が大切であることを話す。
- ・野菜の話では、断面図や野菜の食べてほしい量（実際の量を見せる）のクイズを出し、知ってもらう。

- ・そのほか、牛乳や大豆の栄養、糖分の摂取量を知らせることで、自分で考えられるようになる。
- ・最近の取り組みでは、よもぎおはぎ作りや、ご当地メニューの日を始める。ハッピーランチタイムも始める。ハッピーランチタイムはバイキング方式で好きな場所で給食を食べる。それにより異年齢の交流ができる。
- ・地域との交流では、5歳児が坂井高校とお米作りを行う。田植え→稲刈りをし、園でおにぎり作り。地域の人とは、梅とり、ジャガイモ作りなど行っている。
- ・野菜の生長・収穫を楽しみにする中で、野菜への関心が深まっている。

#### ◎テーマ 魚で「いただきます」の実現に向けた取り組み

- ・感謝できる心を育てるには、「魚」という思いで20年間取り組んできた。
- ・厨房内では、「対話を大切に、伝達は確実に」を心がけている。
- ・食育目標「元気な体は食べた物からできていることを知らせて、動植物などの尊い命をいただいて生きていることに感謝できる子」
- ・一年間「魚」の食育を展開。取り組みとして、①魚を見せて触る②魚のフードモデルで絵を描くことを行うが、どちらもその場限りで興味を持つ子がいなかった。
- ・魚嫌いの理由は、「骨があるから」
- ・企画に入る前にアンケートを実施。魚を消費する地域ではあるが、魚料理から遠ざかっている印象が見られる。
- ・魚のバイキング給食を企画。企画を始める前に「じゃこ」を焼いて丸かじりを行う。結果、香ばしいにおいで食欲をそそり、丸かじりをして食べていた。
- ・魚バイキングでは5種の魚メニュー（鯖の味噌煮、鮭の照り焼き、ししゃものフライ、鱈のみぞれ煮、白身フライ）を用意。人気があったのは鯖の味噌煮。ししゃものフライは低調。
- ・5歳児がカレーの1匹焼きで骨取りをする。食べ方の実演を見てから食べる。対面で骨取りをアドバイス。子ども達は骨だらけになったお皿を得意げに見せていた。その結果、魚を一人で食べたという達成感と、命をいただいているという感謝が芽生えた。
- ・地元の魚屋さんに来てもらい、魚をさばく様子を見せてもらう。小さい魚から、最後はヒラマサ。「かわいそう」「気持ち悪い」→「早く食べたい」「お腹すいた」という心境の変化が現れる。
- ・親子クッキングに関するアンケートの結果、魚をクッキングしたいという声があり、仁愛大学の先生に依頼し親子クッキングを行う。クッキングの結果、魚を調理することや、総菜の魚を食べる家庭が増えた。
- ・苦手だったししゃもの天ぷらの出前クッキングを2月に開催する。揚げたてのししゃもの天ぷらを「おいしい」「うまい」と手づかみで食べる。1年を通して魚が大好きになっていた。
- ・知識より体験の大切さ。食べることは、命をいただくこと。その尊さに気づき、「いただきます」「ごちそうさま」という意識ができるようになってほしい。
- ・幼い子ども達の体験が心の片隅の種として残ることに期待している。

## 2. 討議の概要

### < 1 グループ >

- ・地域の専門学校のサポートをしていただき親子クッキングをしている。
- ・海に近い園は、漁師と保護者と一緒に4、5歳児が地引網体験をしている。
- ・調理師を呼んでの出前授業をする。魚をさばく実演が目の前で見られることができる。
- ・収穫したものを園で調理するだけでなく、持ち帰って家庭でのクッキングにつなげ、食への関心を高める。
- ・給食だよりにレシピを掲示し、メニューを配信している園もある。
- ・離乳食の進め方を実際に見てもらう。保護者の方が進められない、進みが悪い。結果、保護者支援が難しい。
- ・魚だけでなく他のアレルギーの子もいるので、アレルギー対応をどうしているのかという話が出た。

### < 3 グループ >

- ・畑で野菜を育てているところが多かった。
- ・地域の方に畑のサポートをしてもらっている。
- ・田舎と町では、できることに差がある。環境が違っていると差はあるが、いろいろ進めていきたい。

- 
- ・食事のマナーを保護者に伝えるが、なかなか保護者の反応はない。アプローチし続けることが大切。

#### < 5 グループ >

- ・体験することが大事。野菜作りや米作りをしている。
- ・味噌を作るが、作ってねかせる期間の工程（発酵のプロセス）が見られない。見えなくても「こういう風にしていくんだよ」と見せられることをする。見えない食育も良いのではないか。
- ・外国人との言葉の壁があり伝えにくさがある。8か月の子への離乳食が進まない。まだ初期段階であるので難しい。園で共通理解を持っていくことが大事。
- ・食育の見せ方、生ものの提供は難しい。（アニサキスなどもあるため）
- ・法律が変わり、おもちを食べると、のどに詰まってしまうことがあるため食べさせられない、ミニトマトを育てて視覚で「早く食べたい」「どんな味がするんだろう」と体験させたいが、誤嚥に繋がるなどの制限があって難しい。体験がうまくできていくとよい。
- ・保育者、栄養士、調理師が協力していくところもあるが、時間帯も難しく、管理していくのが大変。
- ・畑から朝採れの野菜が提供できるのがよい。

#### < 7 グループ >

- ・絵本を通してのおやつや給食、魚を使つての命の教育、レシピや絵を提示することにより、子どもたちの目の前に出ることによってワクワクする体験ができる。
- ・夏野菜の収穫について、苦手な野菜でもスーパーの物はなかなか食べられない。自分たちで苗を買いに行き、畑で育てるプロセスがあることで野菜の育ちも分かる。魚においても焼いている過程でおいを感じながら、美味しくなっていくという体験ができる。野菜や魚の好き嫌いが無くなっていく。
- ・魚の骨がのどに刺さるといふクレームがある。保護者の理解や連携が大事になってくることを感じた。
- ・子ども達の体験の幅を広げたいが、保護者の理解がないと進めていけない。
- ・越前市はブラジル国籍の人も多く、宗教やブラジル料理に親しむことができるが、ブラジルの文化を親しみながら宗教のことも考えるようにしている。
- ・物価も高く、食材の値段も高くなっているため、食育活動にも影響がある。

#### < 9 グループ >

- ・現場サイドや栄養士がいたため両方からの話を聞くことができた。
- ・離乳食の悩み、おやつ、栽培した野菜の処理方法はどうしたらよいのか話し合えた。
- ・どの悩みにも共通して行きついたのは、調理師や栄養士、現場の先生たちが話し合う場があるのが大切。
- ・一緒に給食を食べることで、いろいろな情報交換ができ、話が深まり、食育につながる。自園調理や委託業者があり、関係性の違いがある。現場と調理室を行き来して積極的に食育についての話を深めていく。

---

### 3. 助言者のことば

#### < 石黒先生より >

- ・食習慣 ライフコースアプローチ、年代に合わせた食育。  
ライフコース→食のはじめの基礎。食育が大事  
子どもの豊かな表情→心身の健康が大事。食を通して心身の健康を図る。大きな役割を果たしている。
- ・毎日食事の時間がある。食事は70～80年と続いていくもの。食育を通して心身の健康を図ればよい。この時期にいろいろな体験をすることが大事。体験がないと知らないまま育ち、親になった時、次の世代に伝えて行くことが難しい。
- ・この時期に1回でも多くの事を体験するとよい。高校生、大学生になっても、そういうことをしたという記憶が残るので、1回と思わずに貴重なものになると思って、続けてほしい。
- ・取り組みをまとめることで、ふりかえりができる。新しいことを取り組むのは大変。0を1にすることは難しいが、やってきた取り組みをまとめていく。アンケートの結果を数字にしてお

---

くことで客観的に見てすぐにわかる。毎年同じ質問をしていくと、年々と変わっていくのか、変わらないのかの結果が積みあがっていく。また数字の変化でブラッシュアップができ、新しい取り組みの一つになる。

- ・子どもの体験は大事だが、家庭へのアプローチも大切。
- ・いろいろな取り組みに参加する保護者はクリアされるが、参加されない方はどうするのか。そういった方へのアプローチをしたいが、皆はどうするのかを聞きたい。

---

<廣田先生より>

- ・地域との交流も上手にしている。年代で途切れてしまうこともあるが、そこをうまくやっているとと思う。
- ・保育の現場と給食室がマッチしている。子ども達の表情がよい。五感で反応する。
- ・調理の体験で魚に対するイメージができています。
- ・坂井高校での様子が見られるのはよい。
- ・保育者と調理場の関係がうまくできている。



## 第7分科会 <保育の社会化にむけて

### ～保育の営みをいかに社会に発信するか～>

司会者	国高保育園	園長	和田 明美
	松岡東幼稚園	園長	加藤 薫
助言者	仁愛大学	名誉教授	西村 重稀
	ふじこども園	園長	藤澤 賢之
意見発表者	幼保連携型認定こども園あさかぜ	保育教諭	吉田 智美
	宮川保育園	園長・主幹	吉田 めぐみ
幹事	亀山こども園	園長	木下 起代

## 1. 意見発表の概要

◎子どもや子育てに関心が持てる社会に

- ・園から園児の保護者への発信  
保護者はデジタルネイティブの世代であるため、園児の遊びや学びを保育のアプリを使って発信する。  
→発信を行うことで子育て支援につなげる、子育てに関心を持ってもらう。
- ・園から未就学児親子に向けて発信  
未就園児の親子が参加できる「おひさま広場」の開催。  
→園見学ツアーと題して園見学することでこども園を知ってもらう。  
→アンケートを取り、保護者のニーズを知ることができる。
- ・園から地域や学校への発信  
地域行事をとおして地域との交流を図る。  
公開保育実施（福井市内の園や近隣の小学校に案内）小学校教諭の研修の受け入れ。  
学生の職場体験受け入れ・園児以外にも災害用の備蓄品を地域へ。

◎地域全体での子育てをめざして

- ・小学校との交流 1、2年生との「志の道」山登り  
安心して入学することができる、地域の人への感謝の気持ちが持てる
- ・地域老人施設への慰問 特別養護老人ホーム若狭ハイツとの交流  
お年寄りを身近に感じ、思いやりの気持ちや優しさを感じている
- ・地域の方との交流 民生委員の方との花苗植え、畑づくり、芋ほり  
園の環境整備に携わってもらっている 感謝の気持ちを伝える  
親しみの気持ちが深まる
- ・未就園児とのふれあい 園行事（タッチプール）への未就園児親子参加  
ともに育っていく姿勢を大切に
- ・保護者の園行事参加 4、5歳児の保育参加 親子木工教室  
自然のものと触れる機会、体験 子どもの育ちを共有したい気持ち

## 2. 討議の概要

- ・それぞれの地域に合わせて交流したり、社会資源を活用したりしていくことが求められる。また、自分の園の強み、地域の良さを見つけて、地域資源の活用もしていく。
- ・ICT の意識が高くなっているが、園の規模によって選択していけばよい。
- ・ICT を取り入れた後、手書き・紙ベースの良さに気付くこともある。  
（ICT が進んだ分、失ったものにも目を向けていく必要がある）
- ・デジタルでよいものはアプリで伝え、写真では伝わらないものは掲示する。
- ・メリット・デメリットを考えて ICT とアナログの両方を活用していくことが大切。

- 
- ・ ICT 化も良いが、年代に合わせて行っていく必要がある。アナログは時には、祖父母・子どもなどが一緒に見ることができ、コミュニケーションの広がりにつながっている。
  - ・ 若い先生を先頭に ICT 化を継承できている。
  - ・ ICT 化はトラブルも付き物だが、現状はシステム問題のみで、漏洩トラブルは起きていない。
- 

<西村先生より>

- ・ 核家族化が進み、相談できない・心の支えがないといったことから、若い父親などは不安になったり孤独化したりする。そのため、親の子育てに関する不安やストレスを解消し、喜びや生きがいを取りもどして、子どものよりよい育ちを実現する方向となるような子育て支援を今後、地域住民の協力を得ながら進めていく必要がある。
- そのため、子育てに関する情報・知識を地域に提供し、地域の子育て支援の向上を図る必要がある。

<藤澤先生より>

○課題と展望

- ・ 情報発信のスキルをもつ保育者の育成→若い世代を中心に。
- ・ 保育の質と発信内容のバランス。
- ・ 発信を通じた政策形成への参画。

○まとめ

- ・ 保育の社会化=子育てを皆で支える仕組み。
- ・ 発信=保育の価値を社会に伝える力。
- ・ 今後は、保育現場と社会の双方向のコミュニケーションが重要。  
→家庭だけでなく、「社会全体で保育を担う」ことが求められている。

---

### 3. 助言者のことば

---

<西村先生より>

- ・ 地域の違いを理解して、保育所の情報を発信していく。
  - ・ できることから一つずつ、工夫して文章化していくとよい。
  - ・ 事業の見直し削減・新たな事業への取り組みも状況によっては変えていくことも大切。
  - ・ まずは、園を理解してもらうことを最前線に発信していく。
  - ・ 地域に情報を発信した時、常に PDCA サイクルで評価・改善していくことが大切。
- 

<藤澤先生より>

- ・ ICT をフルに活用して、上手に自分たちの保育を発信できている。
  - ・ 理念・目的に添え、また地域性・保護者を理解した上で交流・発信が行えている。
  - ・ 全て SNS で見ることができるようになっていて、今の時代に合った試みができている。
  - ・ 保護者のニーズ調査や、どのような子どもの写真を使用するか等考え、園の営みを伝えていくことを今後も大事にしてほしい。
- 



## 第8分科会 <公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割>

司会者	今福幼保園 あおなみ保育園	園長 副園長	朝比奈 由紀子 田辺 英子
助言者	仁愛大学 金津こども園	教授 園長	森 俊之 大廻 晴美
意見発表者	かわだ保育所 ののはな保育園	所長 園長	加藤 純子 寺井 和美
幹事	阪谷保育園	指導保育士	宮崎 真紀

### 1. 意見発表の概要

#### ◎保護者・地域社会とつながりあう保育所をめざして

河和田地区は少子化や高齢化が進み、園児数が年々減少してきている現状。60名定員だが39名の子どもたちである。核家族化の影響などにより子育ての不安や悩みを解消していく必要性がある家庭が増えている。また、コロナ後、園行事の変化や地域行事の減少により、保護者や地域とのつながりが希薄化の傾向になっていると感じている。園が地域社会とかかわる機会を多く作っていくことが大切だと考え、取り組みを進めていくことにした。

取り組み内容として公私立保育研修会を22園で行い遊びのプロセスを作り、その後園内研修、語り合いをし、学んだことをもとに、子どもの遊びから見取った学びを保護者に伝える。遊びのたよりを配信・掲示し子育てが楽しいと感じる。

園の行事を見直し、保育参加は保護者だけでなく祖父母にも参加してもらい、ともに喜びあえる関係を作り地域へ出かけて、地域を知ってもらう。

地域のつながりとして、子育て支援ネットワークが河和田地区にはあり、公民館、保育所、行政、小学校などが連携している。子育て支援事業として未就園児との交流(ほうばめし作りや七夕飾り、人形劇鑑賞など)があり、参加者からは「子育ての不安や孤独感を軽くし安心できる」という意見がある。民間保育園とは5歳児親子が交流し、就学への不安、悩みへの解消、情報交換を行う。小学校との交流では学校生活の場の体験を行う。地域の方とは、野菜の種まきを教えてもらい一緒に取り組みポットへの苗植え、絵本の読み聞かせなどを行い『子どもは地域の宝』として皆で育て合う。

これからも保護者への発信を続け、地域との交流を持ち、地域と家庭をつなぐ役割を担ってきたい。

#### ◎家庭や地域、人とつながり合う保育

若狭町の公立園では一人ひとりが何事にも意欲的に取り組む力や豊かな心を育て、仲間と共に育ち合うことを大切に『若狭里っ子保育』を実践している。保育園も地域社会の一員として家庭や地域、小学校や専門機関と連携を取りながら、それぞれの子どもの発達に個人差に心を配り、豊かな人間性を持った子供を育てることを大切に考えている。

園と行政が発信し、都会在住の移住希望者の方に里っ子保育を体験してもらい、実際に移住してきた人もいる。またハピポという社会貢献活動づくりとして、1点=1円で使えるポイントを貯めて、使い道として「子どものため」という欄を設け、若狭町全体で子どものためにポイントを使ってほしいという希望が35億点集まった。絵本に使わせてもらい贈呈式が行われた。

保護者、地域とのつながりでは保育への参加や、保護者との意見交換会、地域行事への参加がある。結果として大人と関わる幅が増え、保育内容の理解につながり、皆で子育てをするという意思を持つようになる。

これからの課題として、家庭と地域へのさらなる発信、公立園同志の交流から、集団で遊ぶ楽しさを知っていく。しかし子供の数が減少しており、再編への検討が必要であると考えます。

## 2. 討議の概要

討議の柱「公立園として、継続していくことの大切さと、変わっていくことの必要性は何か。」

(グループ1)

継続すること

人口減少の中であっても、丁寧な保育や支援の必要な子への保育を行っていく。

変わっていくところ

若手職員が継続して続けられるような環境を作ることや、学生に現場体験に来てもらい保育を知ってもらうことなど積極的に行っている。

ICT化が進んでいるので、動画を配信したり、保育ドキュメンテーションで配信したりしてさらに保育を知ってもらえるようにしている。

(グループ2)

継続すること

安心安全な保育であること。

そのためにはどうしたらその安心は得られるのかと考えると、相手を知ることや相手に知ってもらうことである。園を開放したり、園児が地域のイベントに参加したりすることをしているが、今後どのようにしていくかが課題である。

変わっていくこと

個人情報の観点からどのように配慮して行っていくか。

保育士職は市のサービスをすべて把握しているわけではないので、行政の方に来てもらってサポートしてもらえるようにしたい。

(グループ3)

継続すること

医療ケア児の地域での受け入れを通じて同じ地域の人との交流。

住民説明会を行い、園の保育方針などもっと理解を得られるようにしていきたい。

変わっていくこと

園児数が減少していく中で、もっと地域の住民に園を知ってもらうこと。

(グループ4)

継続すること

公立が保幼小の連携をする。

配慮が必要な子や外国籍の子を受け入れる。

変わっていくこと

コロナを経て行事等できなくなったこと多い。

鯖江市のように、地域の公民館が事務局となりサロンを開くような試みもよい。

- ・ 気象状況も変わってきているが、その条件の中でも子どもたちに伝えていくこと、経験させていくことは変わらずに大切にしていきたい。

## 3. 助言者のことば

(大廻氏より)

《意見発表を終えて》

2園とも、保護者や家庭、地域とつながっていて、保育の活動は公立として行政と一緒にできるものであると感じた。

かわだ保育所の方は子どもの学びを視覚で伝えることで保護者支援されていることがよく分かった。鯖江市全体の職員が共に学ぶ場があり、多様な考え方をしていることを知ることが、保育の質をより高めている。またふれあいあそびの場がコミュニティーになっていて良い。こどもの声を聴いて子どもが地域に行く機会が増える。丁寧な保育から学びのサイクルが生まれていることがわかる。

ののはな保育園はのどかな環境で五感が働く保育が行われている。地域の幼児教育への高さが伺

---

える内容であった。毎年幼児画展を開催していることなどを通じ、子どもの表現を大切にしていることがわかる。東京まで行き「若狭いきいき保育園」を行うなど、行政とともに少子化対策をされている取り組みや社会貢献活動として行われているハピポが子どもたちのために使われていることに驚かされた。

《討議を終えて》

少子化、人口減少と言われているが、自分の園では何ができるのか？公立として何が必要なのか考える。その部分に気づいたとき、行政に現場の声を発信する。行政の仕事を知り、広い視野を公務員として持ってほしい。子ども主体に動けるということは、保育士が意欲的に保育をしているということである。より丁寧な保育をし、子どもの自己肯定感を育て、質の高い保育が求められている。

---

<森先生より>

《意見発表を終えて》

いろいろな分科会に参加して感じたことは、盛りだくさんの内容を短い時間で説明することより、1つの内容を絞って細かく伝えてもらえるとういのではないかとことである。

特にその市独自の特別な取り組みに関して、参加されている人は、詳しく知りたいはずである。次回に期待したい。

公立保育園としては基本的には地域住民のために何ができるか（全体の奉仕者であること）を考え行動することが大切である。

子どもが人を引き付ける力を中核となるようなアイデアの提言を行っていくことが重要である。地域で求められることには違いがあるので、その地域ごとに合わせたものを考えて取り組んでほしい。

面白いと感じた取り組みとして、若狭町のハピポがあるが、3割が子どものために使いたいという希望がある点から、自分が普段生活していることが人のためになるということ、人のためにしていこうという思いが地域にあることが分かった。

《討議を終えて》

難しいテーマであったが、いろんな意見が出てきてよかった。どういう視点でとらえるか、必要性があつて変わっていく。人口減少から子ども自身も変わり、価値観も変わっている。気象条件(気候)が変化し熱中症、危険動物の増加に伴い園での活動の制限がある。様々な変わるべき課題を分析する。公立としては…地域の子供を分け隔てなく受け入れる。どんな子どもでも引き受ける。公立私立関係なく、全体として変わっているのできちんと対応してほしい。

ICT化が進み保育が変化している。十分な保育を丁寧に行っていく、これからも継続してほしい。園、地域全体、子育ての雰囲気を変えていく。現代社会への変化から一人ひとりの立場で考え、より良い子どもを育ててほしい。

---



# 全体会報告



# 第 63 回福井県保育研究大会 全体会

## 開会挨拶



福井県社会福祉協議会  
保育部会長 澤田 夏彦

## 児童憲章朗読



あかね保育園（大野市）  
保育士 小池 麻友

## 主催者挨拶



福井県  
副知事 鷺頭 美央



福井県社会福祉協議会  
副会長 稲山 幹夫



大野市  
市長 石山 志保



## 祝辞



福井県議会  
副議長 田中 三津彦 氏



大野市議会  
議長 高田 育昌 氏

## 研究発表



テーマ：

「主体的に遊ぶための環境づくり ～一人一人の思いを支える保育者の役割～」

発表者：越前市保育研究会



## 記念講演



テーマ：「支援が必要な子どもをつつむクラスづくり」

講師：桃山学院大学人間教育学部 教授 松久 眞実 氏

## 大会宣言



いなほこども園（大野市）  
保育教諭 高岡 夏希

## 次年度開催地挨拶



美浜町こども未来課 課長 西野 文隆  
若狭町子育て支援課 課長 原田 太輔

## 閉会

大野市教育委員会こども支援課  
課長 岡 吉男



# 大会宣言

本日、第63回福井県保育研究大会が、ここ「名水の里」・「星のまち」大野市で、「『すべての子どもの権利と育ちを保障していく社会の実現』をめざして」をテーマに開催されました。

さて、昨年12月、国においては令和7年度から4年先を見据えた「保育政策の新たな方向性」を公表し、これまでの待機児童対策を中心とした「保育の量の拡大」から「質の高い保育の確保・充実」などへ軸足を移すことが示されました。

また、本県においても「福井県こども・子育て応援計画」が策定され、「こども・子育ての“よろこび”を次世代につなぐ『ふく育県』へ」という基本理念のもと、こども・若者や子育て世代一人ひとりの安心と希望を追求し、こどもの“よろこび”・子育ての“よろこび”を地域全体で共感できる社会の実現を目指した取り組みが本年度から進められます。

これら国・県における政策を念頭に、子どもや子育て家庭に最も身近な専門機関である保育事業所には、すべての子どもの育ちの保障と、安心して子育てできる環境の確保が実現できるよう、より専門的かつ質の高い保育の提供や子育て支援の機能を最大限発揮することが求められます。

ここに従事する私たち保育者は、時代の変化を柔軟に受け入れながらも、これまでの実践を礎に、一人ひとりが自己研鑽に努め、教育・保育の専門職としての誇りと責任を持ち、家庭や地域社会とのつながりを一層深めながら、認定こども園・保育所に求められる社会的使命を果たしていくことを、ここに宣言いたします。

一 私たちは、子どもの最善の利益の保障はもとより、家庭や地域と連携し、こども園や保育所等の利用の如何を問わず、保護者に対する子育て支援に努めます。

一 私たちは、専門職として常に教育・保育の質の向上を目指すとともに、その取り組みを広く保護者や地域に伝えるよう努めます。

一 私たちは、教育・保育を通して子育ての楽しさ・食べる楽しさ・子どもの成長の喜びなどを共有しながら、親も子も育つ環境づくりに努めます。

一 私たちは、心身ともに健やかな成長を支える上で必要な教育・保育について、子どものみならず私たち自身も育ち合う仲間として、職場の内外を問わず積極的に議論し、提案します。

令和7年6月21日

第63回福井県保育研究大会